

## 円地文子『女坂』とプランゲ文庫

—— 初出誌の書誌的考察 ——

吉野貴庸

はじめに

円地文子の代表作に、後に「野間文芸賞」を受賞する、八篇から成る小説『女坂』がある。この『女坂』は『円地文子全集<sup>①</sup>』に初出誌が記載されているように、最初の部分が「紫陽花（のち「初花」）」という題で『小説山脈』第二集（昭和二十四年十一月）に掲載され、完結後、昭和三十二年三月五日に「あとがき」を付けて角川小説新書の一冊として刊行されたとされている。しかしながら、円地自身の記憶違いと思われる記述などもあり、連載について曖昧な部分もある。また、初出誌についても、各種目録、年鑑などに拠ってもその所在が不明瞭である。円地の主要著書一覧については『円地文子全集<sup>②</sup>』で確認できるが、初出一覧のような目録は存在せず、初出誌を総覧することはできない。

円地文子『女坂』とプランゲ文庫

本稿では、『女坂』の最初の部分について書誌的に考察すること  
で初出誌を確認してみた。

### 『女坂』の連載

『女坂』は、『小説山脈』第二集に掲載された「紫陽花」（のち「初花」）で書き始められ、その後舞台を『小説新潮』に移し、連載されたとされているが、『女坂』の完結章である『別冊小説新潮』第十一卷第二号に掲載の「女坂」に付記された「追記」には次のよう  
うにある。

この小説は昭和二十七年十一月の本誌に「初花暦」の題で最初の部分を書き初めてから「彩婢抄」「二十六夜の月」「紫手  
絡」「青梅抄」「異母妹」と六篇を連作として発表して来た最後の  
一篇です。（以下略）<sup>④</sup>

ここでは『女坂』が連載された雑誌は、はじめから『小説新潮』であり、『女坂』のはじめは、昭和二十七年十一月の「初花暦」で、八篇ではなく、七篇から成る小説とされている。

円地は、「私は、後に私の代表作のようにいわれる『女坂』という小説の初めの方を『小説新潮』に書き始めた。」、「高見さんは私が『女坂』の最初の部分を『小説新潮』にはじめて書いた時、大変ほめて下さった。」などと述べている。これらを見ると、円地の記憶違いなのかわからないが、『女坂』は、はじめから『小説新潮』に連載された小説であるように考えられる。

また、次のようにも述べている。

「女坂」も結局連作なんですけど、意図してそうなったわけじゃないんです。あの当時、原稿をそうそう買ってくれないもんですから、初め一つ書いて、次に頼まれた時に、あれの続きを書いていかしらという、結構ですよと言われて、私のほうも気兼ねしながら書いたんですよ、いつも。<sup>⑦</sup>

連続的に掲載された雑誌ということで、『小説新潮』を指していると考えられる。

作家毎に作品の初出誌が記載されている『文芸雑誌小説初出総覧』<sup>⑧</sup>を見てみると、『小説山脈』が収録対象誌ではなかったためかもしれないが、『紫陽花』の記載はなく、『女坂』の記載もない。

「紫陽花」以外の各章となる作品は記載されているものの、連作の小説では無いように記載され、それらが『女坂』の初出とはわかっていない。

このように『女坂』は七篇から成る小説であると捉えることもできる。しかしながらその一方で、円地自身、八篇から成る小説であることを示唆する内容ももちろん述べている。

円地の私小説「半世紀」に、「前後八年の年月をかけて、八篇の短篇から成る長篇小説は完成した」とある。また、随筆「女坂」の舞台<sup>⑨</sup>で、「書上げるまでには前後八年ぐらゐの年月がかかっている。」と述べ、昭和二十四年から書き始めたことを示唆している。

「半世紀」に、次のようにも書いている。

宗子は、どこから依頼されたのでもないのに、ペンを握って琴が夫の命を受けて、妾にするような娘を探すために、東北の勤め先から東京へ出て来る件をまず五十枚ばかりの小説に書上げて見た。<sup>⑩</sup>

「女坂」の舞台<sup>⑪</sup>でも、次のように述べている。

地方官吏の妻である女主人公が、夫に命じられて、家に入る妾を選ぶために上京して来るのがこの小説の発端であるが、その後、まだ少女といつていい年ごろの娘を連れて、東北の任地へ帰って行く。<sup>⑫</sup>

これらではじめの部分と述べている内容は、「初花暦」ではなく、「紫陽花」の内容である。

円地は、「戦後、二十三、四年ごろになつて、それを改めて書いてみたいと思つたわけです」と述べ、「本当に書き始めたのは、昭和二十四年くらいからですね<sup>14</sup>」とも述べている。また、「半世紀」に、「琴の生涯を主題にした可成り長い小説をあらためて、書きはじめようと宗子が思い立ったのは、終戦から三、四年を経た後であつた。」と書いている。

これらを読むと、『女坂』は、昭和二十七年十一月の「初花暦」から始まる七篇の小説ではなく、昭和二十四年十一月の「紫陽花」から始まる八篇の小説ということになる。

### 雑誌『小説山脈』

久保田正文は、「長篇『女坂』は昭和二十七年一月から、三十二年一月までにわたつて『青い葡萄』以下が『小説新潮』、同別冊に発表された。『初花』の章は、『紫陽花』という題で二四年一月の『小説山脈』に発表された。」と述べている。また、板垣直子も、「河盛好蔵の好意で、はじめ『新潮』にもちこんだ作品の『光明皇后の絵』は、『新潮』から拒絶されたが、『小説新潮』が掲載した。昭和二十六年の八月である。そして、そのあと、『小説新潮』は終

円地文子『女坂』とブランケ文庫

始文子に短篇をかかせるようになった。文子の文壇的な代表作となつた『女坂』は、二十七年十一月『初花暦』以後殆ど全部といつてよい位、その後『小説新潮』に、その都度変わった表題でののである。その第一回目は、実は二十四年（四十四歳）の十一月に、『紫陽花』という題で、『小説山脈』にのつた。<sup>17</sup>と述べ、和田芳恵は、「昭和二十四年、『小説山脈』の十一月号に、『女坂』第一章の一に当たる『紫陽花』を発表した。『小説山脈』は小島政二郎が名づけ親で、新興の出版社から出ていた大衆雑誌である。」と述べている。

この『小説山脈』について、『學術雑誌総合目録』、『大宅壮一文庫索引目録 新訂第2集』などに記載がなく、所蔵を確認できない。『国立国会図書館所蔵 国内逐次刊行物目録 平成9年末現在 中巻』によると、「小説山脈 東方社 1集（昭24・4）」<sup>21</sup>とあり、第一集は所蔵していることはわかる。また、戦後出版史研究家である福島鑄朗が戦後雑誌研究のために収集した約六千誌を収録する『福島鑄朗所蔵古領期雑誌目録』を見ると、こちらにも第一集については所蔵されていることがわかる。『全日本出版物総目録 昭和二十五年版 国立国会図書館受入整理部編』には、「小説山脈 東方社 B5 1-2月号 60円（以後廃刊）」とあり（小説新潮については次の通り。「小説新潮 新潮社 A5 4、1-13 85円」）、『小

『説山脈』は、昭和二十五年二月まで刊行されていたようであるが、昭和二十四年版に『小説山脈』の記載は無い。『出版年鑑 一九五一年版』にも、「小説山脈 1 B 5 60 東方社」<sup>24)</sup>とあり（1は月刊という意味を表す）、昭和二十五年中には、刊行されていたことがわかる。文芸作品の初出誌を確認する際に用いる基本的ツールでもある『文芸年鑑』<sup>25)</sup>については、その昭和二十五年度版に『小説山脈』の記載は無い。

『小説山脈』について、富家素子によると、「紫陽花」という題で雑誌に掲載されたことは覚えていたが、自宅に雑誌はなく、心当たりもないということである。掲載誌に関しては分からないが、「紫陽花」という題で掲載されたということは確認できる。『小説山脈』第一集の表紙<sup>26)</sup>に、「小島政二郎・編集」とあり、また、「あとがき」にも、「小島政二郎先生御指導の下に、今日、『小説山脈』の第一集を発行することができました。（以下略）」と書かれている。小島政二郎の出身大学である慶應義塾大学の三田メディアセンターに、三田の文学関係者の資料を集めた三田文学ライブラリーがあるが、そのコレクションにも所蔵されていない。出版社の東方社については、昭和二十一年三月に創立され、昭和三十二年三月に創立された日本書籍出版協会に、協会創立と同時に入会しているが、この日本書籍出版協会でも『小説山脈』については全く把握されていない。

い。

『小説山脈』第二集については、昭和二十四年九月十三日の『読売新聞』1面、十四日の『毎日新聞』1面に発売広告が掲載され、その広告から「紫陽花」が掲載されていることが分かる。

### 『小説山脈』と『小説新潮』

「半世紀」に、次のようにある。

その原稿は、その頃一時月刊で出されていた大判の読物雑誌で小説をと註文された時に渡して、掲載されたが、読みすてられる質の雑誌のことで、読んだという人の声も聞かぬままに時が経って行った。<sup>28)</sup>

『全日本出版物総目録 昭和二十五年版』にもある通り、『小説山脈』はB5版、『小説新潮』はA5版である。この二つの雑誌の大きさを比較すると、「大判の読物雑誌」は、『小説山脈』を指していると考えられ、「その頃一時月刊で出されていた大判の読物雑誌」とある、「一時」というところからも、『小説山脈』を指していると考えられる。

角川小説新書の「あとがき」を見てみる。

この作品の最初の部分を雑誌に掲載したとき、地方の婦人読者から手紙を貰って、作者はどうして倫といふ女主人公をこう

残酷に苛めぬくのか、読むに耐へないからやめて貰ひたいと抗議された。私はその人に返事は書かなかつたが、最後の部分までよみ通してくれば、私が嗜虐性の興味でこの前時代の女の生活を描いてゐるのでないことだけは解つて貰へるのであろうと思つた。<sup>⑧</sup>

「半世紀」には、「読んだという人の声も聞かぬままに時が経つて行つた。」というように、読者の反応が無かつたことを記しているが、角川小説新書の「あとがき」には、「地方の婦人読者から手紙を買つて」「抗議」を受けたというように、読者の反応があつたことを記している。「半世紀」の反応の無かつた雑誌を『小説山脈』とすると、角川小説新書の「あとがき」にある「地方の婦人読者」の読んだ雑誌は、『小説新潮』であり、「女坂」の「あとがき」の通り、「初花暦」を始めとしている。「この作品の最初の部分を雑誌に掲載したとき」、「作者はどうして倫という女主人公をこう残酷に苛めぬくのか」とあり、これは、「最初の部分」には、「倫」への「苛め」が描かれているということになる。しかし、「最初の部分」が、「紫陽花」の内容であるとする、そこには、「倫」への「残酷」な「苛め」は描かれておらず、「初花暦」の内容になる。

「富家は『女坂』異聞」で、「昭和二十四年頃から、後に『女坂』の一部となる短編を雑誌に書き始めた<sup>⑨</sup>」と書いている。「紫陽花」

のことを指しているであろうが、この「後に」というのは、角川小説新書を刊行する時のことを指しており、円地が『女坂』を、『小説新潮』に掲載された「初花暦」から始まる小説としていたやうであると考えられる。

### 『女坂』のはじまり

『小説山脈』第一集の表紙に、「大家力作読切小説集」とあるやうに、「紫陽花」も読切小説として第二集に掲載され、円地は連作の小説を書こうとせず、「紫陽花」は、『女坂』の一篇を成す小説として書かれたものではなかつたのではないかと考えられる。

「終戦」で次のように述べている。

家が焼けた時、私は自分が本当に裸一貫になつたという感じがした。そのことは、私に失望を与えるよりも自分の裸一貫をはつきり知つたことで、一種の勇氣を与えてくれたように思う。それから二、三年は、情けない売り食いの生活が続いた。ただその時私を助けてくれたのは、少女小説というジャンルが当時流行していて、粗悪な仙花紙に二、三百枚の少女向きの小説を書き飛ばすと、それが結構売れたのである。私は終戦後五、六年の間それを書くことで生活したといつていい。<sup>⑩</sup>

円地は、終戦から四年後の昭和二十四年に発表された「紫陽花」

には、それほど力を入れていなかったと考えられ、「それに専念して七年かかったわけではないんです。ほかのもほつぽつ書いていて、本当にまとまったのは昭和三十一年の暮れだったかしら。」<sup>⑤4</sup>とも述べている。「紫陽花」に限らず、それ以後も『女坂』と平行して他の作品を書いてきたようであるが、「初花暦」が、終戦から七年後に発表され、その後、ほぼ一定の間隔でその続きが発表されているのに対し、「紫陽花」だけが、「初花暦」の前に間隔をあけて、「少女小説」を書いている間に発表されている。

『女坂』の舞台、「半世紀」は、昭和三十二年三月に刊行された角川小説新書の『女坂』の後に発表されたもので、『女坂』の掲載雑誌に関して、「主に『小説新潮』だったんですけど」と自身も述べているが、これらは、角川小説新書の刊行があつて述べられたものであると考えられる。円地は、角川小説新書にまとめる際、『小説新潮』に掲載し始めた「初花暦」の前に発表した「小説山脈」の「紫陽花」を『女坂』の第一篇とし、「女坂」の舞台、「半世紀」等で、先に記したように書いたのではないかと考えられないであろうか。以上のようなことなどからも、円地の記憶違いかもしれないが、『別冊小説新潮』第十一巻第二号の「女坂」の「追記」で書いているように、『女坂』は当初、「初花暦」から始まる小説で、「紫陽花」は別作品であり、角川小説新書にまとめられる際に「紫陽

花」の内容を加えた八篇から成る小説となったと考えられる。

#### 検閲とブランゲ文庫

「紫陽花」の書かれた昭和二十四年十一月は、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）の検閲下に置かれていた。昭和二十年九月十九日に「日本出版法」が發布され、新聞、雑誌、図書などあらゆる出版物は事前検閲を受けるため、参謀第Ⅱ部（GⅡ）に属する民間検閲局（CCD）に提出された。昭和二十二年十二月十五日には、一部の雑誌を除いて、事後検閲に移行し、昭和二十四年十月三十一日にすべての検閲制度は終了した。

参謀第Ⅱ部の歴史部で、マッカーサー戦史室の室長としてGHQに勤めていたメリーランド大学のゴードン・ウィリアム・ブランゲ（一九一〇—一九八〇）は、検閲のために集められた資料群の歴史的価値に注目し、検閲制度が終了し、CCD部門が閉鎖される際に、メリーランド大学に移管することを熱望した。ブランゲはGⅡ部長のウィロビーらを説得し、これら資料群はメリーランド大学カレッジ・パーク校マツケルディン図書館に所蔵されることになった。昭和二十四年から翌二十六年にかけて木箱約五百箱に入れられ太平洋を渡り、昭和三十七年から整理され始め、昭和五十四年五月六日に正式に「ゴードン・W・ブランゲ文庫」<sup>⑤5</sup>となり、平成二十年一月よ

り同大学のホーンベイク図書館に移転している。

これら資料群は紙質が悪かったため劣化が激しく、マイクロ化が急務とされた。平成四年に、国立国会図書館の助成により、雑誌保存共同事業を立ち上げ、目録作業が開始され、平成九年三月に完了し、約六万三千枚のマイクロフィッシュが誕生した。

検閲処分を受けた記事の雑誌タイトルや巻号が記載されている『占領軍検閲雑誌目録・解題』<sup>⑧</sup>に『小説山脈』は記載されていないが、冊子体目録である『メリーランド大学図書館所蔵ゴードン・W・ブランゲ文庫雑誌目録』に『小説山脈』の記載があり、第一集と第二集を所蔵していることがわかる。ここには、編者、出版者、出版地、刊行頻度、所蔵巻次年月次、出版部数などが記載されている。<sup>⑨</sup>これらに掲載された記事の検索ツールとしては、占領期雑誌記事情報データベース化プロジェクト委員会により、平成十三年のCD-ROM版を経て、平成十四年十一月、インターネットで「占領期雑誌目次データベース」<sup>⑩</sup>が公開され、「紫陽花」や「円地文子」、『小説山脈』をキーワードに検索すると「紫陽花」を検索することができる。

「紫陽花」には副題として「妾を買う話」とあり、ここからも読切小説として、他の七篇とは独立した別作品とし、角川小説新書にまとめる際に『女坂』の最初の部分としたと考えられる。

円地文子『女坂』とブランゲ文庫

おわりに

本稿での『女坂』の最初の部分の考察を経たことにより、『円地文子全集』<sup>⑪</sup>にも記載の初出誌について、次のように確証を得た。

『女坂』は、昭和二十四年十一月から昭和三十一年一月まで、『小説山脈』、『小説新潮』、『別冊小説新潮』に八回にわたって断続的に掲載された。

第一章 一 「紫陽花（妾を買う話）」（のち「初花」）『小説山脈』第二集 昭和二十四年十一月 東方社 三一頁  
—三八頁

二 「初花暦」（のち「青い葡萄」）『小説新潮』第六卷第十四号 昭和二十七年十一月 新潮社 一〇〇頁  
—一一頁

三 「彩婢抄」『小説新潮』第七卷第三号 昭和二十八年二月 新潮社 一六〇頁—一七一頁

第二章 一 「二十六夜の月」『小説新潮』第七卷第十四号 昭和二十八年十一月 新潮社 一四〇頁—一五〇頁

二 「紫手絡」『小説新潮』第八卷第五号 昭和二十九年四月 新潮社 一〇〇頁—一一二頁

三 「青梅抄」『小説新潮』第九卷第九号 昭和三十年

七月 新潮社 六〇頁―七二頁

第三章 一 「異母妹」『小説新潮』第十卷第十三号 昭和三十

一年十月 新潮社 一六二頁―一七三頁

二 「女坂」『別冊小説新潮』第十一卷第二号 昭和三十

二年一月 新潮社 一七二頁―一八四頁

完結後、昭和三十二年三月五日に次のようにまとめられ、「あとがき」を付けて角川小説新書の一冊として刊行された。

第一章 初花 青い葡萄 彩婢抄

第二章 二十六夜の月 紫手絡 青梅抄

第三章 異母妹 女坂

そして、昭和三十六年四月十五日には角川小説新書と同様の章立てで、新潮文庫として刊行された。

「紫陽花」の掲載された『小説山脈』第二集は海を渡ったメリーランド大学のプランゲ文庫に所蔵されている。プランゲ文庫については、国内では国立国会図書館や国際日本文化研究センターなどでマイクロ資料を利用でき、雑誌、新聞については、国立国会図書館のホームページより検索が可能で、複写物を取り寄せることもできる。『小説山脈』第二集の表紙を見ると、昭和二十四年九月二十七日には検閲を受け、五万部が発行されていることがわかる。この時期は事後検閲となっており、昭和二十四年九月十三日、十四日には新

聞に発売広告も掲載され、刊行後に検閲が行われたはずであるが、この時期の他の雑誌とは異なり、プランゲ文庫以外の所蔵はなく、「読みすてられる質の雑誌」のため散逸してしまったようである。（昭和二十四年四月の第一集については、三万部が発行され、前述の通り、国立国会図書館や福島鑄朗の元にも所蔵されている。）

プランゲ文庫が整理され『小説山脈』第二集の所在も明らかとなり、『女坂』のはじまりとなる「紫陽花」の内容も確認できる。八篇から成る『女坂』として、「紫陽花」と「初花」の本文異同や改題などについては別稿で考察してみたい。

注

- ① 郡司勝義「解題」女坂」（『円地文子全集第六巻』所収 昭和五十二年十月二十日 新潮社 四二七頁―四三三頁）
- ② 郡司勝義「主要著書一覽」（『円地文子全集第十六巻』所収 昭和五十二年十二月二十日 新潮社 四〇五頁―四三七頁）
- ③ 『別冊小説新潮』は、昭和三十五年九月以前は『小説新潮』に合冊。「小説新潮」は、新潮社より昭和二十二年九月に第一巻第一号が刊行され、現在に至る。
- ④ 円地文子「女坂」（『別冊小説新潮』第十一巻第二号 昭和三十二年一月 新潮社 一七二頁―一八四頁）
- ⑤ 円地文子「私の履歴書」小説『女坂』（『日本経済新聞』昭和五十八年六月十一日 24面）
- ⑥ 円地文子「回想の男友達」尾崎一雄（『婦人公論』第五十九巻第五



号 昭和四十九年五月 中央公論社 二一八頁—二三三頁)

⑦ 〈インタビュ〉 現代文学とことば・4 「円地文字」インタビュア  
ー・中村明(『言語生活』4月号 No.295 昭和五十一年四月 筑摩書房  
七四頁—八一頁)

⑧ 日外アソシエーツ『文芸雑誌小説初出総覧1945—1980』(平  
成十七年七月二十五日 日外アソシエーツ)『女坂』の最終章である  
「女坂」の初出誌の巻号が誤っている。

⑨ 円地文字「半世紀」(『群像』第二十三卷第六号 昭和四十三年六月  
講談社 二二四頁—二五二頁)「半世紀」は、「女坂」縁起とも言うべき  
私小説で、「女坂」の倫のモデルが、母方の祖母、琴であったと打ち明  
けられている。倫∥島川琴、宗子∥円地文字。

⑩ 円地文字「女坂」の舞台(『円地文字全集第十六巻』所収「灯を恋  
う」 昭和五十三年十二月二十日 新潮社 六一頁—六三頁)

⑪ 注⑨に同じ

⑫ 注⑩に同じ

⑬ 注⑦に同じ

⑭ 〈インタビュ〉 作家訪問2 「円地文字氏に聞く ひとりの女の生き  
方」聞き手 大原泰恵(『知識』第二十号 昭和五十五年十月 秋季号  
文化総合出版 二四二頁—二五三頁)

⑮ 注⑨に同じ

⑯ 久保田正文「解説」(新選現代日本文学全集17 『円地文字集』所収  
昭和三十四年十一月十五日 筑摩書房 四二二頁—四二六頁)

⑰ 板垣直子「円地文字」(『明治・大正・昭和の女流文学』所収 昭和四  
十二年六月五日 桜楓社 三一—三二頁—三八頁)

⑱ 和田芳恵「円地文字入門」(『日本現代文学全集96 『円地文字』幸田文  
集 増補改訂版』所収 昭和五十五年五月二十六日 講談社 四二—八頁)

円地文字「女坂」とブランゲ文庫

—四三〇頁)

⑲ 学術情報センター『学術雑誌総合目録 和文編 1996年版 IV』  
(平成九年三月二十八日 丸善) NACSIS Webcat (<http://webcat.ni.ac.jp/webcat.html>)

⑳ 大宅壮一文庫『大宅壮一文庫索引目録 新訂第2集』(昭和五十八年  
四月一日 大宅壮一文庫)

㉑ 国立国会図書館収集部『国立国会図書館所蔵 国内逐次刊行物目録  
平成9年末現在 中巻』(平成十年四月二十日 国立国会図書館 一六  
九—一頁)、国立国会図書館蔵書検索・申込システム (<http://opac.nll.go.jp/>)

㉒ 福島鑄朗『福島鑄朗所蔵占領期雑誌目録』(平成十七年九月二日 文  
生書院 七〇頁) 元来の収集目的が戦後雑誌の創刊号の収集であったた  
め、所蔵については創刊号が多い傾向があるが、収集雑誌は一万タイト  
ルを超え、その中から占領期及び検閲期間中を含む一九四五年八月から  
一九五二年三月までに刊行された約六千タイトルが収録されている。

㉓ 国立国会図書館受入整理部『全日本出版物総目録(昭和二十五年版)』  
(昭和二十七年三月三十一日 国立国会図書館管理部 五四—四頁) 昭和  
二十五年版には、昭和二十五年一月から十二月に出版されたものが収録  
されている。

㉔ 出版ニュース社出版年鑑編集部『出版年鑑一九五二年版』(昭和二十  
六年四月二十日 出版ニュース社 八一—四頁) 一九五二年版には昭和二  
十五年一月から十二月までに刊行されたものが収録されている。なお、  
昭和二十四年度に刊行されたものが収録された同書は刊行されていない。  
⑮ 日本文芸家協会『文芸年鑑 昭和二十五年年度版』(昭和二十五年六月  
十五日 新潮社)

㉖ 円地氏の娘、富家素子氏からの平成十年九月六日付書簡

小島政二郎編集・大衆雑誌

# 小説山脈

読みごたへのある小説揃い

十一月号発売 定価六十円  
増刊号全四冊

頼朝の婿 加藤 武雄  
裏切る肉体 田村 黎文雄  
紫陽花 円地 文子  
飛ぶ結婚 丹羽 文雄  
生きている 横溝 正史  
酒月の恍惚 諏訪 三郎  
慈善 綱 久米 正雄

小島政二郎

加藤武雄長篇選集(全30巻) 第二巻

東京・文京・大塚坂下町57・東方社

小島政二郎編集

# 小説山脈

第一号

大家方作語切小説集

中野 實  
野村胡堂  
中村武羅夫  
村松梢風  
加藤武雄  
小島政二郎  
八武松

- ②7 『小説山脈』第一集(昭和二十四年四月 東方社)
- ②8 ヨミダス歴史館(読売新聞データベース)で広告検索ができる。明治七年の創刊号から最新号まで検索、閲覧できる法人向けオンラインデータベースで、明治七年から昭和六十四年までについては紙面イメージを収録し、広告記事を対象とした「広告検索」ができる。この「広告検索」を利用し、キーワード「小説山脈」で検索できる。国立国会図書館をはじめ、大学などの教育機関や都道府県立図書館などで利用できるところが多い。
- ②9 注⑨に同じ
- ③0 円地文子「女坂」(角川小説新書 昭和三十二年四月三十日 再版 角川書店 一九二頁―一九二頁)
- ③1 富家素子「女坂」異聞(「新潮」第九十二巻第三号 平成七年三月 新潮社 二九二頁―二九九頁)
- ③2 注⑦に同じ
- ③3 円地文子「私の履歴書」終戦(「日本経済新聞」昭和五十八年六月九日 28面)
- ③4 注⑭に同じ
- ③5 注⑭に同じ
- ③6 奥泉栄三郎「占領下の極右・極左事前検閲雑誌」(「占領軍検閲雑誌」目録・解題)所収 昭和五十七年十一月十五日 雄松堂書店 五二二頁―五二五頁)次の二十八誌が事前検閲にとどまった。「不二(不二出版社)」、「書星(書星社)」、「新しい世界(日本共産党出版部)」、「文化評論(文化評論社)」、「潮流(潮流社)」、「調査時報(真理社)」、「中国研究(日本評論社)」、「中央公論(中央公論社)」、「科学と技術(日本共産党出版部)」、「人民評論(伊藤書店)」、「人民戦線(人民戦線社)」、「改造(改造社)」、「民主の友(日本民主主義文化連盟)」、「大衆クラブ(日

本共産党出版部）、『世界の動き（毎日新聞社）』、『世界経済評論（総合アメリカ研究所）』、『世界（岩波書店）』、『世界評論（ナウカ社）』、『真相（人民社）』、『前衛（日本共産党出版部）』、『自由評論（霞ヶ関書房）』、『民論（民論社）』、『民主朝鮮（朝鮮文化連合）』、『民主評論（民主評論社）』、『世界評論（世界評論社）』、『ソウイエト文化（ソウイエト文化社）』、『われらの世界（彰考書院）』、『私の大学（ユマニテ社）』。なお、全ての検閲は昭和二十三年七月二十六日に事後検閲に移行した。

- ③⑦ メリールランド大学ブランゲ文庫 <http://www.lib.mund.edu/prange/>  
 (所蔵内容 新聞：一八、〇四七タイトル、図書とパンフレット：約七一、〇〇〇タイトル、雑誌：一三、七九九タイトル、報道写真：約一〇、〇〇〇枚、ポスター：九〇枚、地図：約六四〇枚 平成二十一年八月十日参照)

③⑧ 奥泉栄三郎『占領軍検閲雑誌目録・解題』（昭和五十七年十一月十五日 雄松堂書店）

- ③⑨ メリールランド大学図書館『メリールランド大学図書館所蔵ゴードン・W・ブランゲ文庫雑誌目録 第2巻』(Norman Ross Pub.平成十三年)  
 ④① 占領期雑誌目次データベース <http://m20thdb.jp/> (記事レコード総数：一、九六四、九三三件 平成十八年七月三十一日時点)  
 ④② 円地文子『紫陽花(妾を買う話)』(小説山脈 第二集 昭和二十四年十一月 東方社 三一頁―三八頁)

- ④③ 『小説山脈』第二集(昭和二十四年十一月 東方社)  
 ④④ 第三集以降の所在は未だ不明である(第二集から月刊になっている)。

〔付記〕 引用にあたり、旧漢字は新漢字に改め、旧仮名遣いはそのまま用いた。

円地文子『女坂』とブランゲ文庫

